

石原純は歌集『鬢日』（大正十一年）の序文のあとに添えた「歌集の編集に関することども」という凡例の初めに「この集に収めた歌は私が明治四十四年から大正十年に亘りて作つたものです。……これ以前に並びに此の期間内に於て作つたものでここに載せないものもかなりありますが、それらは多く現在に於て不満足なものであるためにすべて省いたのです。またもと発表した雑誌を得る便宜を缺いてゐたためにその儘にしたものもあります。併し之等もこの歌集を綴るために必要なものではないと思つてゐます。」と書いています。

これらの文は房州保田で書いたようであるが、「もと発表した雑誌を缺いて」いたのは彼がヨーロッパ留学中の作品であろう。この期間中も齋藤茂吉が宛名を書いて『アララギ』を毎号送つていたのであるが、留学から帰るときそのような日本の雑誌まで持ち帰ることは考えられない。それよりも専門書を一冊でも多く持ちたかつたであろう。純をこよなく愛した伊藤左千夫は純が帰つて来る日のために雑誌を別にして保存したかも知れない。しかし左千夫は純がスイスに滞在していた大正二年七月に亡くなつてしまつていたから、そのような心遣いがあつたとしても、事は故人の遺志のように運ばなかつたであろう。

こんな事を考えるのは他でもない。昭和十八年に出した随筆『夾竹桃』に歌集には出ていない滞欧中の作品がかなり多数収録されているのである。それらは歌集編集当時雑誌が手許にあれば、恐らく載せたものである。昭和十八年は太平洋戦争の最中であり、新短歌運動もできない時期であつたから、懐古的なものを集めて本にする、というような事情があつたかも知れないが、それよりも重要なことは作者がそれらの古い作品に深い愛着を持つていたことである。

そればかりではない。明治四十四年以前のもものは全部省いたといい、それらは歌集にとつて必要なものではないと言いながら、同じ随筆集に明治三十八年の作品が収録してある。歌集編集当時とは多少考えが變つたとしても、やはり捨て難いものであつたことは確かである。それらは左千夫の相伴をして萩寺から百花園の方を散策したときの歌文、病む父の歌、父を失つたときの歌、おのおの若干首で、『アシビ』（馬酔木だがアシビと書く）第二巻に載つたものである。純は明治三十六年ごろから歌を作り始めたと言つてゐるから、これらは最初期の作品ということになる。

石原純は雑誌『アシビ』が出たのを見て興味をおぼえ、その募集歌に応じたという（歌集序文）。そこで『アシビ』を見るとその第二号（明治三十六年七月）に

伊藤左千夫選で二首採られている。「詠馬酔木歌」という題がついている。作者が歌集に入れなかつたものを引張り出すのは大人気ない気もするが、作者はもはや歴史的人物であるから、その修業時代の作品を取り出して試してみても別にわるい事でもあるまい。そこで二首中初めの一首をあげると

五月雨のふりはふりとも水無月のてりはてりとも馬酔木枯れそね

というのである。

ところでこれだけを見て、古いとか幼稚だなどと言つても始まらない。この歌がどんな時代にどんな環境のなかで作られたかと見ておく必要がある。このあとに民部里静の「馬酔木第一巻を讀みて」五首があつて、その第一首は「足ひきの馬酔木吾見つ歌靈のほひ足らせる花にしありけり」とある。そのあとに選者

左千夫の「晩春新夫妻に寄す」五首がある。その第一は「若みどり青葉がなかの新室むろに清住すがすむ二人おもかげに立つ」というのである。正確に言うと『アシビ』では

「若みどり」「おもかけ」などのように、濁点をつけない古風な書き方をしているが、読みづらいため引用は岩波文庫の新編『左千夫歌集』（七五）の表記に従つた。

純は『アシビ』では石原阿都志と記名しており、しばらくして名を知られると阿都志とだけ書いている。雑誌『科学史研究』（一九八一年秋の号）へ「石原純生誕百年」（西尾成子共著）を書いたとき「石原純の名は本来アツシと訓むべきことは歌稿に石原阿都志と記名しているのによつて明かであるが、また通称ジュンのみずから承認していたことは科学論文にJ・I——と署名しているのによつて知られる」というふうに断定的に述べてしまつた。アツシを命名者が与えた訓みと思つたからである。辞書を引いてみるとこの訓はどうも無理のようである。しかし名乗にはずいぶん無理なのがあるからそう解釈したのであるが、ことによると命名者の訓ではなく本人がペンネームのつもりで自分でこう訓んでこういう文字をあてた可能性もなくはない。しかしこの表記は明治三十八年まで、その後は本名で書いている。

蛇足であるが思いついたまま書いておくと、齋藤茂吉は本当はシゲヨシだそうである。これと紛らわしいのが安部能成で、こちらはヨシシゲだという。どちらも当人らの口からきいたので間違いはない。こうなると、それぞれモキチ、ノウセイと呼ぶには如くはない。

次に第三号（三十六年八月）には左千夫選で一首、第四号（三十六年九月）には左千夫選で二首、第五号（三十六年十月）には巖真選一首と「秋風日記」という写生分が出ている。写生文は「秋風」という課題に応じたもので歌は入っていない。第六号（三十六年十一月）には巖真選一首と左千夫選二首第七号（三十六年

十二月)には左千夫選で二首が載っている。第八号(三十七年一月)を見ると「納曾短歌会」という左千夫筆の記事がある。「癸卯の十二月十九日、馬酔木発行所無一塵庵に開く。曾するものわづかに四人、例によりて談話の興に耽る多事、點灯始て題を頒つ、日く冬朝、日く鳥、各題五首宛。検点の結果左の如し。」四人とは主人左千夫のほか藤真、安江秋水、阿都志である。阿都志の作は両題とも一点をもらっている。

ところで癸卯というのは明治三十六年である。その十二月の歌会に純は出席しているのである。歌集序文によると純は『アシビ』発刊の翌年、すなわち明治三十七年に左千夫を本所の寓居に訪ねたようにとれるが、それは正確でないことが判明した。しかもこの歌会のために初めて本所を訪ねたようには思えないので、この年の秋か初冬に初めて訪問したのであろう。純はこのとき二十二才で、九月から東大理学部(現理学部)の学生であった。

次に第九号(三十七年二月)になると「戲詠理学思潮歌」二十六首が左千夫選で出ている。これは純が左千夫を訪ね、自分は物理を勉強している学生であるという自己紹介から始まって、好奇心の強い左千夫がいろいろ質問することなどがあつた後に作られたものであることは疑いない。左千夫はいま話したことを歌にしてみるなどと言つたかも知れない。その中の一首をあげてみよう。

世の中は相ひくことのあればかも妹は豆挽く吾は大根曳く

これはニュートンの引力にかけて作つた数首中の一つで、われわれはこの種の歌の背景に万葉や戯歌や子規の滑稽歌を考えることができる。前者は例えば巻十六(三八五三)「石麻呂に吾物申す夏瘦に善しといふ物ぞ鰻取り食せ」(めせは反語という古註がある)、後者は「仮面二つ某より」という詞書のある「わざをぎの、にぬりのおもて、ひよとこの、まがぐちおもて、世の中の、おもなき人に、かさんこのおもて」という短い長歌などである。そのことの『アシビ』には「滑稽欄」というのがあり、同じ九号にも赤木格堂らの作品が出ているのを見ると、滑稽趣味とでもいふべき一面がこの雑誌にあつたのであろう。

ニュートンの引力の法則を教科書に書いてあるように述べたのでは、語数合せでも歌にはならないので、作者は趣向を試みたのであろう。ローマのルクレチウスの『自然詩』は自然の理法に関する作者の考えを詩の形で述べたものであるが、あれは本当に詩といえるかどうかが問題であろうと思う。古代のインドでは天文学や数学でも韻文でうたつているが、あれは人々の記憶に便利のように工夫された方法だと思われる。これも詩とは言われないであろう。石原純はのちに新短歌というものを提唱し、叙事詩は詩でないと言つたことがあるが、これはまたあとで考えよう。

つづいて第十号(三十七年四月)には「砲煙壯花」九首、十一号(三十七年五

月)には「詠旅順閉塞壯歌」、十二号(三十七年七月)には「真壯夫(詠広瀬中佐歌)」があつて、あとの二つは長歌である。それらは明治三十七年ということを頭において見なければならぬものであり、長歌形式を用いたのは万葉集を勉強中の習作といふべきであろう。第十三号(三十七年八月)の「狭霧」八首も日露戦争にかかわるもので、これは当時の重大事件であつたから歌づくりも無関心ではいられなかつたはずである。

第十四号(三十七年十一月)には子規三年忌歌会の記事(左千夫筆)があつて、会者十一人、題は秋海棠であつた。阿都志のは五首採られている。ほかに雑歌五首があるが、長くなるので引用は省く。第十五号(三十八年一月)に十月短歌会のことがあつて、会者十二人、阿都志の作は二首出ている。『アシビ』はこの十五号まで通しの号数がついていたが、この次から巻号を表記するようになる。

第二巻第一号(三十八年二月)には「霜」という課題で選者長塚節は阿都志の作

霜がれの菖蒲の古葉搔きとればしたふく赤芽乏しらに見ゆ
に対して「面白き見付け所なれど、第一句動くの憾あり」と述べている。「第一句動くの憾」とは、他に言いようがあるう、との意見である。もう一つ

山吹の枝の乱れをつかねたる藁に霜おき真白けく見ゆ
に対して節は「俳句にていはば難なからむと思ふ事柄も歌にていふ時は耳ざはりになることあり、そは文字の数のおほきため殊更に聞ゆるなるべし、この歌の如きもいささかその難あらむか、されど見付所は面白し」と丁寧な評言を述べている。

同じ号に課題「悲」に応じた歌

かつて吾が田端野を行き哀しみし焼場のかまど父を焼くかも
があつて、選者左千夫は「父を焼くと露骨ぢやといふ人あり、尤もなる評なり」と述べている。

二の二(三十八年四月)には「攻城難」二十六首が出ている。石原阿都志はもう『アシビ』の有力な一員になつていた。同じ号に二月と三月の歌会の歌合計七首があり、その中にも戦争関係のものが多いのは時勢を反映していると言えよう。二の三(三十八年五月)には「露国の内乱」という題で十六節から成る長歌の連作がある。

二の四(三十八年七月)に「憂愁吟」と題する大連作がある。初めの二十二首は父を失つた悲しみを詠じたもの、それに続く「春寒き運河の水わたりでみいくさに従へる人のものがたり聞く」という題のものは二十五首ある。前にふれたように、父を失つたときの歌が随筆『夾竹桃』に七首収められている。その随筆集も今では珍らしいかも知れないので次に引用しておこう。ほんの少しだが加筆が

あるので、引用は『夾竹桃』により、原作を註記する。

ちちのみの父にわかれて百日しもはぬ日はなく春たちにけり

時さればかなしきころ忘れんと思ひ待ちにし春は夾にけり

さにはべの過ぎししゆる花はるかぜに乱るるころを人知るらめや

いめにだに相見るべくは山とりのさ夜ながながに明けなくもがも（さ夜ながながと）

こふれども父はいまさず山吹の花しききつつありにけるかも

ふる葉たまる庭の隈つちくだしつつふる春雨にもものし思ほゆ

菰寒きばせを藁づとしばしばに雨かも降りぬ春の仮庵かりほに（雨かも降らるる）

これらの歌を作ったとき作者はまだ大学の学生であつた。筆者がこれまでに読むことのできたこの人の文章の中で、彼の父の事にふれた記事は同じ随筆集にある「昔の本郷」という文の初めに「小学の尋常二年、三年の頃は父が愛知県に赴いたので、その間だけは欠けているが、ともかく本郷育ちと云つてよい……」とあるだけで、彼の父がどんな人であつたか私は知らない。

同じ号に歌会のことがある。七月九日、この日無一塵庵へ来たのは阿都志と（民部）里静の二人だけで、主人と合せて三人であつたが「日中暑気に苦み、日没して蚊に攻められる、即盛に蜜柑の古皮を蚊遣に焚きつつ、各十首を作る」というわけで、今から考えると一つの歴史的情景である。阿都志の歌は五首載つている。そのうち一首を記しておく。

五月雨の枇杷に音降り紫陽花の色ます夜らは灯かげ淡しも

二の五（三十八年九月）には「病を養ひて小笠原父島にある友を偲びつつ……吾が心緒を述ぶる歌」という前書きで二十二首の連作がある。この中には自分の父の思出に連なるものがある。これに続いて「梅雨」という題の十五首があるが、長くなるので引用は省く。

二の六（三十八年十月）の課題欄に「半秋日」という写生文があつて、この中に歌が入っている。初めの方を少し引用してみる。

九月十日、風穏やかに暑さはげしき日なりけり、ひる過ぐる程に家を出で本所茅場町がり志しゆく

蓮の実はとぶちふ堅川に蓮田はあれどその実飛ばねば

秋はいまだ幾日も経ねば藁笠を被きてゆかねば衣手あつし

風もなき秋の暑さに垢の浮く溝の濁りはたまりてあるらし

少し省き「夕べ近き頃主の翁とふたりして庵を出で路をたどりて萩寺にいづ」というわけで、歌があり向島の百花園まで足を延すことになった。歌は全部で二十

四首ある。これを少し省いて十九首にし、文も多少約めて「秋の日」という題にしたものが前記の『夾竹桃』(二―六)に収めてある。これは阿都志にとつて忘れることのできない半日であつたと思われる。

これと直接関係はないが『アララギ』十二の七(大正八年七月)「伊藤左千夫号」で純は左千夫の手紙(葉書を含む)十三通を発表している。その中で年代の最も早いのがこの年(明治三十八年)九月七日付けのものである。文面が長くないから葉書かも知れないが最後に「發送の時御手伝願上候」と書いてある。純はぶらりと行つたり歌会に出たりしたばかりでなく、『アシビ』の發送の手伝いもしたのである。大正十四年ごろわれわれもアララギ發行所で同じようなことをしたのである。

二の七(三十八年十一月)には「秋雑詠」四十九首、「秋の樹木」五首、「初冬雑詠」五首の計五十九首が出ている。たいへんな勉強ぶりである。初めの連作は四つの部分から成り、その第一は前に小笠原父島に病を養う友を偲ぶ歌があつた、その友人が療養の甲斐なく亡くなつたのを悼んだものである。その第一首をあげておく。

ばなな吹く秋の夜空の冷たさに君が伏しけむ島辺しおもほゆ

其二は「十月十五日松戸に遊び相模台の高丘にのぼる云々」という前書きのある歌、其三は「十月二十二日、左千夫、蕨真、(三井)甲之、(増田)八風諸子と相携えて京を發し將に明日横浜沖の凱旋觀艦を拝觀せんとす云々」の歌、其四は「人におくりける」その他の雑歌となつている。「秋の樹木」というのは課題であつた。

三の一(三十九年一月)には「ふる落葉」という短文に歌を交えた作品が載っている。内容は病気の父を大病院へ移したときの思出を書いたもので、これが「落葉」という題で『夾竹桃』(七―一二)に収められている。歌は十首ある。初めの方の文の所を省いて

父が病看むと我がゆく夜の途の櫻の落葉霜に冷えたり

病む父に一夜を侍り霜は踏む朝の歸りに世らは静けし

家に残りし只一人の妹と相語りつつ、朝の日和のうるはしきに、

三つ四つ枝に残れる柿実を落しなどせるに、そぞろこほしくて

三つ残る柿を落して霜月に病みていまさぬ父を恋ひけり

母ゆきて十まり八とせその冬の霜月がなかに父病みませり

(以下略)

なおこの号からは純と記名し、以後阿都志と書くことはない。

三の二(39・2)巻頭に「御獄乃歌合」の記事がある。「明治三十九年一月、此の重々しき新年の初頭、明けて七日といふ日を以て、吾々は甲州御獄の峡中に於

て歌会を開けり、……一行の人々は……神奈桃村、森山汀川、久保田柿人、村上蟬室、三井甲之、増田八風、蕨真、伊藤左千夫の八人、猶東京の石原純甲州の岡千里信州の篠原志都児諸角竹舟郎柳沢廣吉の諸氏皆来会の約ありしを、各故障ありて果たさず、云々」(左千夫記)というわけで、石原純は不参であつたが、上記の面々は当時のアシビの雰囲気を伝えているのであろう。

この号の純の歌は十二月歌会の記事中に出ている。そのとき無一塵庵へ来たのは石原純と三井甲之の二人だけで「例の如く課題にて詠む、純九首甲之二十五首左千夫十五首、録するもの左の如し」とあつて、純の作は六首載つている。参会者が少かつたせいもあつて、左千夫の評言がついているので、それも一緒に引用してみる。雑誌では評言は六号活字になっている。

静

上つ毛の毛野の三山は冬をこぞり聳えかあらしかの北空に

(評) 冬といふ詞は幾分静な感じを含めるには相違いなきも、

此歌に頭われたるだけにては静を感じることに聊か覚束なく思ふ、

且つ何処に毛野の三山を指定してこの想像を起こしたるかが明ならず。

鍛冶が家に植も鳴らさず冬の夜の此のさぶしきに貉なくきこゆ

美濃の青墓の野に旅の子のしぐれかあらんこよひぞおもふ

(評) 旅の子たるものの吾子にや人の子の上に云へるにや明かならぬは欠点なるべし。

冬されのふる江の水に鰻かき吾ある空ゆしぐれ降りきぬ

(評) 「吾ある空ゆ」の詞殊更に聞ゆ。

手

ひだり手の弓とる方の眉根かき恋ふちふものか妹はあやしき

冬されば水づくしが手のかかゆれど人には言はずいたき思は

(評) 恋人に耻づるとの心にや、うら若き少女の小さき苦勞なるべし。

三の三(三十九年三月)に東京歌会のことがあつて、里静、純、八風、蕨真、

左千夫の作が出ている。純の六首は次のようである。

朝かへり乏しくもあるか鯖船のしぐれ漕ぎぬく臚の音高しも

年飢て人の厩に馬を盗み獄につながゆ泣く児らを描きて

夜走りの舟の白帆のほの明み山焼くらしも人声もすも

牛飼へる茅場の庵の裏べなる蓮氷はすひの田井に雪の積むみゆ

浅間人馬挽く朝を鴨の毛の雪ちるなして山の灰ふる

春浅く雪解の野辺に蒼繁き松が根くぼに残る雪かも

三の四(三十九年五月)には「驢耳弹琴集」と題する歌が十八首ある。この作

者らしいと思われる若干首をあげてみよう。

佐和山の雉子羽さわがし地震揺りて五日尚そそぐ春の雨かも

白梅の椀を商なふ能登人の訪ひきぬ俳に名ある庵と

黴の花あまたふく粟の餅焼きて翁が歌きかむ梅の宿りに

八皺田や土の裂け目の螺の戸を東風ぞ吹くらし螺のくろ戸を

春既に野べ青みたり万葉の歌の馬酔木を未だ見ぬかも

科学者の感覚や想像力が感じられるような作を選んでみた。このごろだいぶ調子が出て来たように思われる。歌の題は自分の好きなように歌うという気持を現したものであろうか。

三の五（三十九年七月）は創刊三週年記念号で、純は「艸香華落集」十二首を出している。そのうち五首をあげておく。

春の日は淡靄緩く地にひきて鉛色なる水田は暮れぬ

古銅瓶鏽あるらしの鳴く音とぞ蛙聞くなる無一庵かも（無一塵庵）

燭差して古色ゆゆしき藤夕べひとり誦しける萬葉の歌

薬園や梨の花散る葉がくれに蜂蜜匂ふ月夜となりぬ

真鍮もちてたかむな掘れば璞つちに雄蟬潜みぬ夏近みかも

最後の歌の「たかむな」はタケノコを菜として食うときの称と『言海』に書いている。万葉尊重から古語を好んで使うのは今から考えると行過ぎであるが、古語の中に歌語として結構使えるものがあることは事実のようである。

三の六（三十九年十月）に九月歌会のことがある。これは根岸の子規庵で開かれた。左千夫の筆で次のように書かれている。「竹乃里人先生五週年忌の月なれば、根岸の旧廬に會す、当日は差合ふ事もやとて月の九日と定めぬ、例により蕨真上総より来る。予と相携えて根岸に至れるは昼過ぎて二時といふ頃なり、次で三井甲之来る石原純来る、最も後て鈴木葯房来る、母堂まめまめしく用意整へ給ふ。庄兵衛の釜陳元贇の茶碗木皮の炭取りなど、取揃へられたれば、有りし世の事切に偲れて尊とし、庭の草木も心あれや。「臥して見る秋海棠の梢哉」と吟じ給ひけむ、それもまどひの内を漏れざりけり、糸瓜の棚は跡を絶ち、大鳥籠も取片けて今はなし、去歳の暮には寒花三輪を見きといふ冬牡丹の徒に茎延たるも語りくさ

の一つになむ、かき曇れる空合いつしか小雨降りいでし淋しき、人数少なければ、物静かに人の心ゆくさまに打語らふ、とりどりに詠み置ける歌ども書き記せは」という文につづいて純三首、甲之三首、葯房三首、左千夫四首が記されている。純の第三首に

去歳なりし秋の騒ぎの戒厳いましめに花野うらぶれ行きしこと思ふ

というのがある、これは明治三十八年九月、日露講和條約に不満の人々が日比谷公園近くの交番を焼打する事件が起つて、東京に戒厳令が布かれたことを詠んだもので、この作者がこういう歌を作っていることは注目してよい。

三の七(39・12)に「土華水鏽集」二十二首がある。この題の気持は私には分らない。

霖雨ながあめに白澁病める葡萄葉のしづく佗びつつきく時鳥

草摺たへの細布のころもを靡かせて皇子ゆかすらむ寧楽の青山

同じ号に楽々亭歌會のことがある。「十月十四日例会歌会を下総なる千葉に開く。楽々亭歌會即是れなり、猪之鼻台に続く千葉寺村の一隅を占め今年新に成れる瀬川博士の別墅は近く人界に接するも能く人界を脱せり、云々」の記事(左千夫筆)がある。成東から參會した人もあり、東京からは石原純が加わり計七人である。次の純の歌二首はおのおの二点を得た。

八千草の千葉の高野ゆ開きたる青空が下に秋の海見ゆ

千葉の野の秋は晴れたり青戸なす総の遠山たなびける見ゆ

同じく一点の歌次の二首があつた。

秋霧に青き山々透き見ゆる松の木の間まに飛ぶは鶉らし

秋雨の百日降りつぎ崩えたらば千葉の大野はさぶしからんもの

四の二(40・5)に無一塵庵歌会の記があり、「一月某の日三人相會して歌会即成席上眼に触るの物と次ぎ 詠める」のあとに里静、純、左千夫の歌がある。前二者は各三首、左千夫四首。純の三首は次のとおり。

姫さぶる林檎の冬を愛でつつぞこだも偲ぶこふる君がへ

春浅くください残る山庵に朝日かげさす犬も鶏も居り

楽焼の茶器弄ぶかたはらにおほけきジャボンを藤籠ふじかごに盛る

これで純の作品は終つている。『アシヒ』はこの次の四の三(四十一年一月)をもつて終刊となつたが、これには純の作品はない。四の一(四十年三月)にもなかつた。巻号の次に附記した発行年月は雑誌の奥付に載っているもので、正確にその月に出たとは限らない(奥付には日まで書いてあるが、日付は省いて表記し

た)。それはそれとして後になると間隔が開いているのが眼につく。これは同人雑誌の経営のむずかしいことを物語っているといえよう。

『アシビ』の終刊号に次に『アカネ』という雑誌が出ることが豫告されている。

これは三井甲之が編集責任者になつている。十何号か出たというのが左千夫が期待したものとは遠かつたらしく、明治四十一年十月『アララギ』（阿羅々木、阿良々木）が下総の蕨真方から発行され、翌年九月（第二卷第一号）から発行所が東京の伊藤左千夫方へ移つた。石原純は創刊第一号から作品を出し、ここで有力な同人の一人となるのである。ここでは彼の修練の時代を眺めてみたのである。

『アシビ』が廃刊になり、やがて『アララギ』（阿羅々木、阿良々木）が発刊される事情については齋藤茂吉「アララギ二十五年史」（全集、第三十五卷）および土屋文明『伊藤左千夫』にくわしい。その間に『アカネ』というのがあつたが、石原純はこれには作品を出しておらず、伊藤左千夫に従つてアララギ同人となつた。その活動については前記「アララギ二十五年史」によつて大略を知ることができるが、ここでは石原純に焦点を合せて述べてみたい。

『アララギ』第一巻第一号（明治41・10）に純の歌「秋興集」二十一首がある。

これは「放縦欄」という所に出ている。少し引用してみよう。

山の峡花採みゆけば溪に鳴る秋の河原のさらさらによし

秋風は河原に茂るみづ榎の諸葉をみだしきのふけふ吹く

二荒の山はたふとし鏡なすおほき湖原を御たらしにせり

一の三（42・4）の同じ欄に「氷颺雑歌」（筆者註、颺はツムジカゼ）二十四首がある。初めの部分の詞書に「料峭たる氷の山もてかこめる辺の、土人のむれに住みて、かの所謂北極地方青氷紅雪の珍奇なる色彩と風俗とを畫き尽したるひとりの畫家ポリソフがことも偲びて詠みける」とある。この畫家のことは手許にある資料程度では分らないが、第二首に

氷のくにのサモイド人のむれと住みて鬚はそらざる慣ひせりけり

というのがある。辞書を引いてみると、サモエド人というのはアジアの北海岸に住みモンゴル族であるという。その一連の歌がこのほかに十五首もある。其二として「雪ふりける日詠める」歌三首と「軽気球といふものにて天空をかけめぐらば珍しきこともありぬべし」という詞書の歌五首がある。そのうちの二つ

夏空にかかる白斑の織雲を寒き氷と世の人は見ず

別に秀歌というのではあるまいが、この作者でないと作れないだろう。科学のきらいな人々は嫌味にひびくかも知れない。

二の一（42・9）に「樟の香」という題の六首と、雑歌五首がある。前半から少し引用してみる。

草こけば手にしむ汁の濃青にも浸みてありなむ情なりしを

もの思ひなやむをみなは菱の実のひがむころにをの子をぞ見る

世に堪えずしなんいのちは麦の穂のくろきしひな穂の枯るる如しも

この作者の歌が少し変つて来た気がする。引用の第一首は長塚節調のような感じがふとしたので、節歌集を操つてみたが同臭の歌としてあげるべきものはないからなかった。同じ仲間（年は二つ上）だから、影響とか何とかいうことは抜きにして、似たような歌があつても何の不思議もない。最後の歌にある「麦の穂のくろきひな」を都会育ちの純は見ることがあるのだろうか。節から仕入れたような気がしないでもない、少くともその趣向について。

同じ号に「課題の歌」（純選）がある。題は「彗星」で、これは来年（明治43）ハレー彗星が見えることが話題になつていたので選んだのであろう。（筆者は小学校へはいつた年で、この彗星をはつきり覚えていて、そのうちまたやつて来る。）初めに左千夫の歌二首があつて、選者の評言がついている。

稲扱きて夜更けの風呂に男女あやしみ騒ぐ森の上の星

評云、複雑な景情をうたつて居る。之を絵に書いたら寧ろおもしろからう。

歌では森の上があまりきかない。

をなごがつね恐れ居る古楠のくらきが上に尾引く星かも

評云、天地の現象は一種の謎である。謎は之を解するものの如何によりて其の意を異にする。此作者はをなご等がなどと云ひながら自らも之に興味を感じてゐる様子が見える。

なかなか手酷しい評論である。同時にここまで成長した評者の姿を目の前に見る心地がする。まだ見ていない星を、恐らくこの若い科学者の説明や新聞記事などを参考にした課題作であるから、誰がやつても空想の部分があるう。次に柿の村人（のちの島木赤彦）の四首がある。

とこしへの空を流らふ星の尾の光は遠し消えてかへらず

評云、天漠々、世怛々（筆者註、ダツダツは「かなしみ、つかわれさま」と辞書のまま）

ははき星かかれる下にひろらなる國の枯原民ほろびたり

評伝、彗星と亡国との聯想は余りに旧に泥めるものにあらずや。

黄道ひのみちの名残の空にほのぼのしく尾を曳く星の光淡しも

ほろびゆく鈍色にじび空にはろかなる光を曳きて急ぐほかしも

評伝、此宵衆睽四天に聚る、天遅く暮れぬ。

その他の作者は略して、最後に選者純の十首に自註をつけたのがある。少し長いが作者得意の場面であるから全部あげてみよう。

世に小さき望ち多んきやうのひとつにしひろなるあめを得探るべしや

自註、我國唯一の天文台、纔に口径八吋の望遠鏡を有するのみ。

塵とぶみやこのそらは珍らほし出づといふともただにかそけく

註云、識者夙に東京の地の天文観測に不適なるを慨くこと久し。

さやけくぞ燦めく空の稀なるをむしろなげきてわれは星見む

註云、必ずしも真意にあらざるも、亦如何にかせん。

種板にはつかに得つる星像がたのははきに似るをそれとも見むや

註云、写真に撮りて僅にそのおぼろげなるものを見るのみ

空さむきときはきさらぎ天たかく雙魚座に入る彗ながほし

註云、二月ハレー漸く近づくを見ぬ。

薄くもゆ成れるがごとき彗ほしの蔽はむあめのひろらにながらに

彗尾はきをのながくし曳けば飛ぶを近みうち見る天を掩ふときあらむ

註云、ハレー彗星の尾の中を地球の通過する方まさに数月の後なり。

地のおもに触れはするともうす雲のつぶらには見えじほのかにしあれば

稀星まれほしのすべくとるぞ幾條いくすぢのひかりかがやく諸星に似ず

註云、すべくとる(彩帯)は光源の組成を徴るすべき随一の現象なり。

天に充つる輻射のあれば箒ほしのうす尾はながく日にそむく方に

註云、彗星の尾は以て輻射圧の存するを証するに足る、因て歌はむとする
処は之を解する者のままなり。

彗星が何かの前兆ではないか、と思うのは古代メソポタミアの民に限らない。
また地球がその尾の中を通過すると聞けば、現代人でも危険ではないかと思うの
は自然である。その解説は歌では無理であろう。ことに最後にあげた歌などは作
者の独壇場を通り越して独りよがりと言われても仕方があるまい。しかし一生に
二度見る人は少ないほどの珍しいハレー彗星が近づいたのだから、少しは昂奮す
るのも当然と言えば当然であろう。

ここまで書いてから気がついたのだが、「二月ハレー漸く近づくを見ぬ」という
註記があるから、それは明治四十三年でなければならぬ。この歌の出た巻号の
下に入れた年月は額面のもので、実際の発刊日は今では分らない。このことは土
屋文明『伊藤左千夫』(一九七)に注意してあることだった。

三の七(43・9)にはぐつと変つて「洪恋」九首がある。同じ号に課題「洪味」

(純選) というのがあるから「渋恋」はこれと関連する着想であろう。

した金のをく錆びたる鏡をばわがおりやらむひとりある妹に

結句は「いも」でなく「いもうと」とよむのであろう。上の句に渋味を持たせたと見えようか。事実を詮索する必要はないが、この作者には妹が一人いたので、自然に出て来た下の句である。

課題の最後にある選者詠には長い評言がついている。

春の夜を茶を挽くひとのうすひげのしろさ数ふるしが子もあるべし

純云ふ、今回の課題は歌の材料を制限せずして其趣味をまとめやうと思ふて出したのであつた、従つて渋い趣味をよるこぶとか何とか云ふ心もちで作つた歌を要求しなかつたのであつたが、そう云ふ歌が少なかつたのは自分の遺憾とする處である。大体に於いて佳作と思うところのものが極めて乏しかつた、止むを得ず採つたのが沢山ある。もう少し諸君の奮励を望むこと切である。

四の一(44・1)に「伊良湖雜記」(一)という文があつて歌はない。石原純は東京大学理学部を明治三十九年に卒業してから引続き大学院に学び、それから陸軍砲工学校教官として勤務した。伊良湖崎に陸軍の射撃演習場があつて、そこに実習に行く学生に同行したときの事を書いたのである。これを読むと弾道計算の指導をしたことが知られる。この続きは四の三(44・3)に掲載された。この号に課題「十二月」(純選)があるが、選者の作はない。

四の八(44・9)に「都を思ふ」八首がある。石原純はこの年新設された東北大学理学部の助教授として仙台に赴任し、物理学教室の人となつた。のちに歌集に収めた作品はこの年から後のものである。八首中五首が歌集に収められた。その初めの二首

地をかへて住みなれぬ家にさみだれのいく日も降れば栗の花過ぎぬ

住みなれぬ家の庇の朽ちたるにしろきかみ黴かみふくさみだれのころ

精確にいうと歌集では第一首の初句が「移り来て」と改められている。私は昨年「石原純と短歌」(『短歌』十月号)を書いたとき、石原純の歌が近ごろの文学全集のたぐいに入っているか否か私は知らない、と述べた。そのあとで筑摩書房の『現代短歌全集』第五卷(一九八〇年十月刊)に『鑿日』が収められていることに気づいた。そこで読もうと思えばこの版によればよいわけで、これからは特別の必要のない限り、歌集に入つてるとか何とかいうことは書かないことにする。ただ歌集の方は単に年代順に並べたのでなく、大まかな分類をして編集してあるので、雑誌に載つた原作と対比するには少し手間がかかる。

私はこの作者の短歌を全部集めておきたいと思ひ、網羅的にするため初句索引

用のカードを歌集と雑誌と両方から書き抜いた。このカードを見ると原作と改作は自然と並んでしまい一目瞭然である。しかし今はそれを披露する段階ではない。

五の三(45・3)には「雲」という課題の選をなし選者詠一首がある。この号の「消息」という欄に古泉千樫筆で「仙台の石原純氏は愈々西欧留学の相近づき候ため来る三月中旬に御上京の由。其の際は同人相会して名残惜しき清談に一夕なりとも過したきものと存じ居り候」とある。これとは別に「三月東京歌会」の予告があつて「三月二十四日(日曜)石原純君の送別会を兼ね三月歌会を開く。同日正一時迄齋藤茂吉宅(青山南町五丁目八十一帝國脳病院内)に集合の事。当時は記念撮影す。会費約五十銭。同人諸君は万障繰合せの上是非参会あらむ事を望む」とある。このときの写真が何処かに保存されていないだろうか。

五の五(44・5)の巻頭カツト下に純の短い消息文が二つある。一つはアドリアノフスクから(四月五日)、もう一つはバイカル湖畔より(四月六日)のものである。

五の八(45・8)に左千夫宛の手紙が「ミュンヘンより」という題で二ページにわたつて掲載された。

五の九(大正1・9)にも六月二十七日独逸ミュンヘンにて、という消息があり「アララギ御送り被下ありがたう。おもしろく拝見いたしました。歌論の盛なのは結構のことと思ひます、云々」とある。文面から茂吉宛と思われる。この「歌論の盛な」ことについては茂吉の「アララギ二十五年史」(全集三十五の四三一以下)を見るがよい。一口でいうと柿の村人(赤彦)や茂吉が先へ行つてしまつて、左千夫が取り残されたと思ひ孤独を感じる、そういう時期であろう。そうして左千夫が「在独の石原純へ訴へた」(土屋文明『伊藤左千夫』二二二)のは大体このころであろうと思う。

六の一(2・1)にドイツから最初の歌が出た。「思ひで」という題で、長い詞書のあとに十一首ある。これで丁度一ページに収まっているので、編集者が詞書の組方を工夫するというような配慮があつたものと思う。ちなみにそのころの編者は齋藤茂吉と古泉千樫とでやつていたようである。この歌は歌集に入っていない。歌集編集当時、雑誌が手許にないので省いた、という部類に入るのであろう。昭和十八年に出された随筆『夾竹桃』にドイツの歌が収めてあるのは、この辺の事情を物語つていられると思われ。

同じ号に「チューリンゲンの森より」と題する新体詩のようなものが二篇ある。これら是一部を省いて前記『夾竹桃』に再録されているが、詞書だけ省き詩は全部引用してみよう。

我耳に 聞き分かねども

野鬚を 梳らぬ男の 声の濁みさ

我れを見ぬ。

朝夙き ウエストファレンの

靄隠る 野の中に 放たるゝ

牛の背の斑 配色のおもしろさ。

山腹は 赭き屋根の 白き壁の

一むらの 家の目に立つ。

地図に見れば 綾なす

汽車路の 岐れのあれば

旅なれぬ 心落ちあらず。

もう一つは

フレダの河の 圓く流れて

夕靄にか黒き 山裾を

わが汽車の めぐり行くに

向ひよりもくる 汽車の白き煙の見ゆ。

フレダ河とウエラ河と合ふ

低き谷の ミュルデンの 町圍む

山のうつくしさ。

夏寒き この國の 潤葉樹の

九月半ば 既に黄葉せるを見る

髪赭き 國人の老いて

髪白くなるは 稀なりと云ふ

秋の葉は 黄ばみながらに落ちぬ。

数世紀も古き家。

煉瓦の 壁に 匍ひまとうふ

蔦の黄のみぞ 秋は赤き。

『夾竹桃』へ再録したときには各行の頭をそろえてあるが雑誌のときのままで出した。このあとに山宮充の訳詩、土屋文明の「くも」という新体詩があるから、このころの『アララギ』ではこういうものも場所を与えられていたことが知られる。別の号に左千夫のものもある。これから約十年後に石原純は定型の短歌を否定し

て自由律短歌を唱え実作するようになる。この詩はその走りである、などと言え
ばこじつけになる。運命の毛まりがどう転がるかは髪のみぞ知るであつた。

同じ号についても一言。「消息くさぐさ」に、八月二十二日ミュンヘンにて、
九月十五日ミュンスターにて、十月三十日ベルリンにて、他一通があつて、その
中に「アララギ当地にて拝見」とある。これは茂吉宛と見られる。雑誌は毎号送
られていたと思われる。茂吉の書いた「編輯所便」に「石原純氏は今回ベルリン
に転ぜられ候」とあつて、所書きが書いてある。

六の二(2・2)に「独都より」十九首がある。その第一首

リンデンの嫩芽わかめの萌えを見て過ぎしここにまた來ぬ、枯れ葉落つる日

短歌に句読点をつけるのは、逐一検討したわけではないが、このあたりからかと
思う。歌集を作るときには、されに三行四行に分けるようになる。小休止を置き
たい所に点を打つてそのことを表記するのは自然的であるが、従来の短歌ではそ
れもしなかつた。赤彦の歌に句読点のついたのが一つある。「静もれる車上の姿、
みづからの病を知れる吾子が静もり」(『切火』七五)、大正二年の作である。誰
が先などということではないが、茂吉に「涙ながししひそか事も、消ゆるかや、吾

より秋なれば桔梗きぢがうは咲きぬ」(『赤光』二〇八)、これは明治四十四年作である。

六の四(2・4)に「独都より」(其二)が何と八十六首ある。歌集には出てい
ないので少し引用してみよう。詞書は省く。

うつくしきバル・サイソンの盡くる頃冬を惜しめる人のあるべし

この歌の「バル」は舞踏会で、「サイソン」はフランス語の「セizon」(季節)
をドイツ語ふうにしたのかと思うが、「バル・セイゾン」という熟語は辞書にも
出ていない。しかし意味はそれで通じよう。この歌は『夾竹桃』に入っている。

おもしろき中世紀のさまにならびたる家のゆかしも都のそとに

あたらしき白煉瓦の壁の目にさえて秋ゆくそらのおもしろく見ゆ

ましろなる服をば着たる小さき子がひとりとしてある鉄門に入りぬ

もつと引用したいが先があるので割愛しよう。ドイツから送った歌はこの大連
作で終りであり、あとは帰朝後に作ったものになる。そういう訳で少し間を置い
て、七の七(3・8)に「滞欧雑記」(一)が現れており、文末に「大正三年七月
仙台にて」とある。文中に歌が十首ある。これは歌集にも前記の随筆集にも入っ
ていない。ロンドンの歌

霧ふる都はふるし、人の子のあまた聚まる都は黒し

煤すすぶれば物は黒むべし、このくろき空気をすひて生きむ人はも

などは黒というのを選んだのではないが、この作者には黒が実によく出て来る。七の八(3・9)に「滞欧雑記」(二)があつて歌は十二首入つている。やはりロンドンの歌で

小ちひさき家郊外にあまた並びぬこの静かなるに我れ住みにけり

一様に代赭色せる家ありと我が住める街をかつては思ひぬ

日曜はよく曇りたりぬ我もまた家人いへびとと午後の茶につどひけり

などのような落ちついた感じの作品である。

七の九(3・10)の「滞欧雑記」(三)もロンドンのことで歌は十二首。前の静かな歌と少し毛色の変つたものもある。

わがこころそるをんなを見る如き郵便函のあかき色かな

次の、集配便は四時とありぬ、ゆうびんを入れに来る人もなし

初めの歌は、もし合評会でもあつたら、さまざまな批評が出たことであろう。二番目のはこの作者独自のものと言えようか。

八の九(4・9)には作品はなくて、消息「仙台便」がある。この中に「：九月号に何か書けとのこと、私も時には漫筆やうのものでも書かうと思はぬでもないが、いつもその時になるとこんな事かいてもつまらぬと思ひかへしてはやめてしまひます。ローマ字世界といふ雑誌の八月号の第一頁に茂吉兄の Yamagawa no Tagichi no Doyomi 云々の歌と、赤彦兄の Kumo toku の歌が載つてゐる。かう歌をローマ字で書いたのを、御読みになつてどういふ感じがするかを承りたいものです。クラシカルの漢字假名まじりで書いたのを見るのとは少なくとも其感を異にするに相異なる。それは併し歌の價値に係するものではないでせう。否さうなくてはならぬ事でせう。私は漢字を以てする新熟語(殊に學術語に多くの例を見ます)の、音声的言語としての價値を疑うてゐます。そしてもつゝ眞実の日本語を作るためには漢字を用ゐる事の大不利益なのを切実に感じます。御高見を伺いたい。」とある。これは傾聴すべき卓見である。ちなみに赤彦の歌は「雲とほくまたも行きなん桑の葉のしげみにこもりこの水を飲む」(『切火』二三三)であり、茂吉のは「山河のたぎちの響とよみとどまらぬわぎへの里に父老いにけり」(『あらまた』一二〇)であるが「とよみ」とふりがながついている。

余談になるが、この消息のあとに「小野三郎氏の訃」が載つている。小野三郎というのは実は数藤斧三郎で、一高の数学の教授であつた。五城という号で俳句

を作り、短歌も試みた。その歌稿は岩波茂雄を通してアララギへ送られ、一高で講義をきいた齋藤茂吉が一應目を通して掲載したという。そのさい名前を小野三郎とした。『五城句集、附短歌』（昭和四年、岩波）がある。

八の十（4・10）に「閑言」と題する随筆がある。これはさきほど引用した「仙台便」の文面に対応するものである。歌は「実験室の夏」八首がある。

わが頭脳おもたげに垂る、真夏の陽厚き鉛の伸べ板に照る

夏の日 は 実験室は寂しかり、鋼鉄のうへの面錆を見る

独自の境地である。二首めは「夏休み日の実験室」と直して歌集に入っている。もう二首収録されているが省略する。

八の十一（4・11）には「自然科学と哲学」という随想二ページと短歌「心瘦せて」八首がある。

つちのいろは見るに眼痛し金属の音は聞くに鋭し何処に生きむ

息づけば想なき胸をさす如く空気の流れ沁み入りにけり

電球の球いちじろく黒く見えぬ我の心の瘦するを覚えて

こころ瘦せて我は生きにき秋ふけて冷ゆる暈に我を据ゑつつ

秋の来て我のこころも白くおぼゆ天地しづみもの冴ゆる頃

あるときは小さき塵のひと粒に眺め入りけり狂者のことく

これらの歌は最後のものを除き歌集でいくらか加筆されている。しかしそれを一々書いていると長くなるばかりでなく、作品の研究になる。ここではアララギ時代のこの作者の活躍ぶりを見ているのである。石原純の作品として鑑賞するには歌集によるべきこと勿論である。

同じ号に「短歌会の記」がある。「石原さんが仙台から来られた。寒い國からたまさかに来られて五日間の忙しい時間を惜しみつつ帰られた。夫れでも十月二十四日の日曜は一日曾して二科会と現代美術社主催絵画展覧会とを見て夜は石原さんの令弟のお宅へお邪魔して歌を作った。」（無記名だが古泉千樞筆であろう。）純の歌二首は

店のまへに竝木街ありぬ舗石に秋されば降る雨はほそしも

秋の雨ふり初めぬ舗石に雨粒の数へらるる程をさびしみにつつ

このあとに赤彦一首、千櫓三首、茂吉三首、中村憲吉一首がある。八の十二(4・12)に「朝の気は」という第の歌八首がある。

酸素おほき朝の気はよし実験に興ずるころ我れにそそりて

金属の冷たく見ゆるおもてさへ息曇りぬる朝のなつかし

この二首は齋藤茂吉の「アララギ二十五年史」に引かれているものである。専門は異うがやはり科学者である茂吉がこれらの二首を抜いているのは同感できる。もとより八首全体を眺めての話である。

九の一(5・1)には「ダンテの『神曲』に現はれしルネッサンスの精神」という随想七ページと「朝の生活と夕の感想」という十六首がある。

スチームに蒸さるる室につと入りて冬の朝なるここに侵みぬ

夕かげは室にせまりぬスチームの音鈍りゆくも淋しかるかも

いまだ燃料危機の声もなかつた大正の大学研究室がありありと浮んで来る、古き良き時代であつた。

九の二(5・2)に「シベリアの旅」(一)十八首がある。ヨーロッパへ留学のためシベリアを汽車で通つたときの歌で、これから七回にわたつて連載されることになる。その号数を書く必要もあるまい。また作品は歌集について見ることができるので引用は省く。

九の十(5・10)から「孤村の方へ」と題する大連作が始まり、五回つづく。そのあとに十の三(6・3)から「諸の國びとの集り」が十の十二(6・12)まで七回つづく。また十一の一(7・1)から「霧降る國」というイギリスとくにロンドンを題材とする連作が発表される。以上の四つの大連作はのちに歌集で「欧亜行」としてまとめられることになる。

十一の二(7・2)に「児ら病める日に」三十五首がある。これは歌集に入っている。同じ号に「仙台歌会の記」(石原純記)がある。この中に「近頃になつて私の同僚の掛谷君が其の真摯な生活を歌はうとする興味を有せられることを知つて、稍こころ強く感ずる様になつた。…此の新年には丁度原阿佐緒氏も当地の大学病院を退院せられて尚ほ小時滞在して居られたので一緒に集会された。…」とある。

同僚の掛谷君というのは数学者掛谷宗一のことである。その歌は「冬木立雲と相對

きひもすがらこの広原に鳥もとばなく」および「春ちかし斑雲はだれの山に雲わきてゆるく南に流れながるる」の二首。なお阿佐緒、純とも二首、ほかに五人の参會者のおの一首が載っている。

十一の十(7・10)に「山國の町」十八首、十一の十一(7・12)に「旧藩の名ごり」十八首、十二の一(8・1)に「諏訪のたひら」十八首、十二の二(8・2)に「富士見高原」十八首、これらは歌集で「信濃の歌」となるものである。十二の三(8・3)「平生つねのち」十六首、十二の六(8・6)「遅春」八首、これらも歌集にある。

十二の七(8・7)は「伊藤左千夫号」で、純は「追憶」を書いている。その中で「馬酔木が発刊されたのは明治三十六年のことで……そのうちに毎月歌会が先生の宅で開かれるやうになつて、其年の秋過ぐる頃に私は始めてその歌会の日を訪ねて行つた」とある。純はこの年高等学校から大学へ進んだのである。この記念号に純は「賜賞」十八首を出した。それは相對性理論と量子論の研究に対して恩賜賞を受けたことを歌つたものである。また石原純宛左千夫の手紙十三通がこの号に発表されている。

十二の十(8・10)は「第二左千夫号」で、純は「暴るる海辺」八首を出した。

十三の一(9・1)に「國境」(信濃歌統其一)十八首、「國央くになかば」(同其二)十八首、

十三の二(9・2)「終駅」(同其三)十八首。十三の三(9・3)「学寮」(同其四)

十八首、「山原」(同其五)十八首。十三の五(9・5)「雨日」(同其六)十八首。

十三の七(9・7)「曇り」八首はこの雑誌に載つた最後の作品となつた。

あとの方の数年は精しく書くことと余り長たらしくなるので簡単にしたため、作品目録のようになつてしまつたが、前にも述べたように歌集は大きく分類して編集されていて年代順ではないので、原作を検索するために上記のリストは手掛りとなるはずである。

そういうわけで、あとの方は短歌作品を主としたため、文章の方は省いてしまつたのである。しかし、どうしても省くことができないのは「短歌連作私論」である。これは十三の一(9・1)あら七回つづき、十三の十二(9・12)には文末に未完の文字を残したまま、そのあとが掲載されることはなかつた。これはもとより伊藤左千夫の連作論を踏まえてのものであるが、やがて従来の短歌を捨てて自由律短詩もしくは新短歌を唄えるようになって、それらの連作ということを言ひ、実作しているのであるから、その関連においてこの論文は見逃せない文献である。